

「エレジー～父の夢は舞う～」に主演される舞台俳優・平幹二朗インタビュー



高い評価を得ながらも、再演の機会に恵まれなかった舞台作品を、キャストとスタッフが可児市に滞在しながらじっくりとリメイクし全国に発信する、可児市文化創造センターの ala Collection シリーズ。その第4弾として、1983年に読売文学賞を受賞した清水邦夫の傑作戯曲『エレジー』が上演される。主演は、日本を代表する舞台俳優・平幹二朗さん。本作品で実に四半世紀ぶりに清水作品に挑むことになった平さんに、今の心境をうかがいました。

様々な舞台で類希な存在感を発揮されている平さんですが、地方発信型の舞台に出演されるのは、今回が初めてだそうですね。

そうなんです。そんなこともあって、参加させていただきました。一生に一度こういったものに参加するのも面白いかなと思ひまして。ただ本音を言えば、僕にとっては結構辛い試練になりそうだなと感じています。というのも僕は、自分の部屋に閉じこもり、ああでもない、こうでもないという試行錯誤をしながら作品と自分の内部をつげる部分を探り出したのち、それを稽古場に持って行って戦い合うという方法でやってきたので、全てをオープンにして一緒に稽古をすることが苦手なんです。孤独に生きることに慣れてしまったもので、家族が出てくる芝居がやれることは、擬似家族が得られるようで楽しみなんです。でも、そもそも共同生活というものが苦手なんです。とはいえ今回は、それを乗り越えることも楽しみにしたいと思っています。

清水邦夫さんの作品に出演されるのは、25年ぶりだとうかがっています。

はい、四半世紀ぶりです。『エレジー』は、僕が清水さんの『タンゴ・冬の終わりに』と『夢去りて、オルフェ』に主演したのとちょうど同じ頃に、宇野重吉さんのために書かれた作品だと聞いています。宇野さんにあてて書かれたものだけあって、狂気や激しい役を演じることが多かった僕がやらせていただいた、劇的なシチュエーションの二作品とは全く趣の異なる作品です。僕自身、こういった静かなシチュエーションの中で起こる嵐のような作品をやるのは初めてなので、新しい境地を拓ければと思っています。宇野さんのような素朴な味が出るかどうかわかりませんが、僕なりの形で探っていきたいですね。

平さんは『エレジー』という戯曲のどんなところに魅力を感じていらっしゃいますか。

息子の嫁とのやりとりによって、年老いた元高校教師の中に、錆びかかっていた男の部分がほのかに呼び覚まされて、心がちょっと乱れていくさまが、微妙な描き方で色っぽく書かれているところですね。表面の夕方の空のようなある静けさとは裏腹に、心の中ではさざ波、いや、もっと激しい波が渦巻いているのかもしれない。僕が演じる男だけではなく、登場人物それぞれが孤独を抱えていて、男が暗闇で上げる嵐のように定かではない何かを求めて、表面的には静かにぶつかり合い、すれ違っていく。内容的には悲しい話ですが、重く暗いものではなく、コミカルな会話がポンポンと交わされるお芝居なので、“エレジー”という題名通り、しみじみと見られて悲哀の残る芝居になっていけばと思います。

平さんご自身は、どのように演じようと考えていらっしゃるのでしょう？

まだ細かく読み込んでいないので、何とも言えませんが、それぞれの生きて立っている場所や生き方が普遍的にお客さんに伝わるような“生活感”というものが、演技に必要なになってくると思うので、なるべく怪しくならないようにやらなきゃと思っています（笑）。なおかつ、日常生活でもよくあるように、言葉と思いが裏腹な面がたくさんあるお芝居なので、まずはそういう面を洗い出していきたいですね。

7月に劇団四季の『ヴェニス商人』に客演され、36年ぶりに浅利慶太さんとお仕事をされた平さんですが、本作品に劇中劇として出てくる『アンドロマック』は、最初に浅利さんに演出を受けた作品とか？

そうなんです。不思議な縁を感じますね。『アンドロマック』というのは、お互いに一方通行の4人の男女の愛を描いた物語で、僕はこの作品で浅利さんから、言葉というものを一言一言はっきり発音し、意味を明確に伝えることを教わりました。戯曲の文学的な力を感じて、言葉や文体をクリアに伝えるという浅利さんの“芸術至上主義的”な表現に出会って、「僕はこういうことをやりたかったんだ」と感じましたね。俳優座での僕は“背の高いおとなしいお兄ちゃん”といった存在で、人畜無害な役ばかりやっていたので、内面に抱えた激しいものが噴出するような役がやれたことも嬉しくて。



ほかには、どんな演出家の方たちに影響を受けて来られたのでしょうか？

最初に 11 年間いた俳優座では、やはり主宰の千田是也先生です。僕は元来気が弱いといいますが、人前で自分を発表することがあまり得意じゃない性質。俳優座では激しい役がやりたいと思いつつも主張できずにいたんですが、千田先生はそんな僕に、時々激しい役を与えてくださった。なかでも、千田さんが演出された『メフィストフェレス』で、ファウストをやらせてくださったことは大きな経験になりました。千田先生には芝居の基本というものを教わった気がします。

その後、出会われたのが浅利さん。

そうです。自分の中の激しいもの、暗いもの、優しいものを役に投影できる快感を知って、「俳優って大変だな。でも面白いな」と感じました。それで、7 年くらい日生劇場で一緒にいろいろやらせていただいたんです。その後出会ったのが、「もっと、ぐちゃぐちゃにやったほうがいいよ」という蜷川幸雄さん。僕の演技を演出的手法でより開いてくれる蜷川さんとは、いろいろな芝居を十数年間一緒にやって、あらゆる可能性に挑戦しました。そのいちばんの突破口となったのが、女形に挑戦した『王女メディア』です。性別をも超えて役を演じたことで、自分の中にあった表現の壁が全部取っ払われ、表現的に楽になった気がします。そこから十数年のブランクを経て、蜷川さんとはまた一緒に芝居をやるようになったんですが、そのブランクの間に鶴山仁さんや栗山民也さんという、今すごく活躍している若いやりの演出家と仕事が出来たことで、表現の幅をまた広げてもらえたように思います。

70 代の現在は、こういったスタンスでお仕事に臨まれているのですか。

今は、仕事を続けられること自体ありがたいといいますが、一つの仕事を終わるとホッと自分が居ます。昔は、ずっと先まで続く大きな坂をせっせと上っているような感覚で仕事をしていましたが、50～60 代で離婚や病気を経験して以来、一作一作に全身全霊を込め、いつ俳優人生が終わってもいいように、自分の納得できるやり方で超えていこうというふうに、考え方が変わったんです。以前の僕は、人の失敗を激しく叱責したりして、傲慢だったと思いますよ。それが病気をしたことで、自分も思っていたほど完璧ではないんだな、人に支えられて生きているんだなということに、ようやく気がついた。病気のお陰で、人との調和を学びました（笑）

一方で、次々と新しいことにもチャレンジされています。

役をいただくと、あまり躊躇することもなく、なんだか面白そうだなと思ってしまいますよ。そもそもオファーがあるということは、僕にこういう役をやらせてみたらど

うかなと、考えて下さった方がいるわけで、そう思って下さるのなら、そういう面をやってみたいと思うほうです。だいたい俳優というのは、待っている仕事。自分から「こういうものがやりたい」と開いていくのは大変なので、待っていて来た役にパクッと噛みつくような感じなんです。僕の場合は“食い意地の張った魚”みたいなもので、わりと何にでもすぐパクッと噛みついちゃうんです（笑）。

その好奇心やフットワークの軽さが、きっと若さを保つ秘訣なのでしょうね。

かもしれませんね。固定したイメージを守るということも、それはそれで俳優の生き方としていいと思いますが、僕の場合は“昔にこだわらず”という生き方でやっている。守りが無いんですよ。せっかく作ったイメージをもうちょっと守って、それを売り物にしたほうがいいのになあと思うこともありますけれど（笑）。何でもやってみたいと思う性質のようで、すぐ次のものにパクッと行ってしまふ（笑）。でも、それが自分を自由にしてくれるし、俳優として店を開けている以上、開店休業状態は嫌ですからね。ただ、休養は必要だなとは感じています。

